

### 松江市の新収蔵資料紹介（4）樋野温迪収集文書

#### はじめに

本シリーズでは、近年松江市が収蔵した「民間アーカイブズ」を紹介しています。第4回となる今回は、令和3年度（2021）に収蔵した「樋野温迪（ひの・あつみち）収集文書」をとりあげます。松江市の故・樋野温迪さん（2020年没）が所蔵していたもので、第一期収蔵「戦争関係史料」7点と第二期収蔵「郷土史料」20件39点に分かれています。

これまでにとりあげた（1）勝田孝興関係文書、（2）米村家文書、（3）林幸之助文書は、いずれも家や個人のもとに伝わった、いわば“意図せず残された”文書でした。これらと比べると、今回の「樋野温迪収集文書」は、“意志を持って収集した”コレクション的要素の強い文書と言えます。順に見ていきましょう。

#### 1. 第一期収蔵「戦争関係史料」

第一期【目録1】は、アジア・太平洋戦争中、樋野さんが自宅や学校、動員先で自ら入手し、長年保存していたものです。

これらは、松江市史編纂事業を行っていた平成24年（2012）に史料編纂課（当時）で調査させていただき、目録作成の上、写真撮影をしていました。その後、編纂事業も終了した令和3年（2021）2月、史料中の1点「神州不滅!!」ピラを戦争遺跡の講演会で紹介したいという要望

が「戦後史会議・松江」世話人代表の若槻真治さんから寄せられました。そこで、画像提供の許可を得るため樋野家にご連絡したところ、温迪さんは前年9月に90歳で亡くなられていたことを知りました。ご家族に遺品の中から史料原本の入った箱を探していただき、今後の取り扱いをご相談した結果、松江市に寄贈いただくことになったのです。

## 大日本帝国海軍航空隊「神州不滅!!」ビラ



【写真 1】大日本帝国海軍航空隊「神州不滅!!」ビラ

目録番号 1「神州不滅!!」【写真 1】は、昭和 20 年（1945）8 月 15 日の終戦の後、大社基地（出雲市斐川町出西）の「大日本帝国海軍航空隊」が徹底抗戦を訴え、航空機から投下したビラです。当時、樋野さんは旧制大社中学校の学生で、出雲市大津町にあった自宅でこれを拾われたそうです。

「降りテ千年ノ汚名ト永遠ノ暴壓ニ生キルヲ思ハズ原子爆弾恐ルヽニ足ラズ」

「我等最后ノ一兵マデ戦ヒテ神州ヲ護持セン」

など漢字カナ交じりでガリガリと刻まれた文字は、現代のどんな歴史教科書よりも強烈に、戦争終末期における兵士の狂気というべきものを伝えています。史料原本の持つ力でしょう。

第一期分にはこのほか、大社中学校で配布された終戦の詔書（目録番号 2）、学徒動員された日立製作所安来工場の服務規程「工場精神徴応士服務紀」（目録番号 3）などが含まれています。島根県下の戦争史料として、非常に貴重なものと言えます。

## 2. 第二期収蔵「郷土史料」

第二期【目録2】は、樋野温迪さんが収集していた郷土史料です。第一期の寄贈手続き完了の書類を持って樋野家に伺った際、ご家族から「他にも故人が集めていたものがあり、自分たちには価値が分からないので、市で役に立つなら持ち帰ってほしい」という希望がありました。

書棚を拝見し、驚きました。樋野さんは定年退職後、古文書講座や松江市史講座などに熱心に参加されていたと伺っていましたが、ご自身でも歴史関係の史料を収集しており、市内の老舗古書店「だるま堂」の値札やビニール袋がそのまま残る和本が数多くあったのです。そこには『出雲風土記仮字書』『雲陽秘事記』『雲陽大数録』『雲陽軍実記』等の近世の写本・版本のほか、明治期の地方文芸誌である勝部一郎編『いづ茂』、大正期の『島根県写真帖』など、出雲部の重要な郷土史料が含まれていました。この収集方針は、単に歴史が好きということに留まらず、後述する樋野さんの家系も深く関わっていたと考えられます。ご厚意をありがたく受けさせていただくこととし、令和3年7月、第二期「郷土史料」を寄贈いただきました。

### 樋野さんと勝部貫一（其樂）

先に紹介した「神州不滅!!」ピラについて、樋野さんはこれを大津町にあった自宅で拾われた、と書きました。この生家・樋野家は、出雲の英語教育の先駆者とされる勝部貫一（其樂、1846-1933）が明治10年（1877）に開設した「包蒙館（ほうもうかん）」のすぐそばに位置していたのです。

勝部貫一は出雲国神門郡今市に生まれ、塩冶の伊藤宜堂の有隣塾、播磨の河野鉄兜塾、豊後日田の広瀬林外の咸宜園に学び、維新後、明治2年（1869）に長崎の英国領事館で訳官となりました。ここで補助官（後に領事）を務めていたアイルランド人のJ.J.クイン（追記参照）の下で働きながら英語を学びます。そして明治7～9年（1874～1876）、クインの賜暇帰国に伴ってアイルランドに渡り、フォーキル（現・北アイル

ランド、アーマー州の国境沿いの村)の学校に入ります。この留学中に貴一が故郷の父母に送った手紙を、勝部家と親しく行き来していた樋野家の方が当時丁寧に書き写し、保存していました。これは後に勝部其楽評伝が書かれる際、貴重な資料となっています。

そして、貴一は帰国後の明治9年(1876)5月、父が私塾・三河屋を開いていた郷里の今市町上成で島根県最初の英語学校を開きました。県都・松江にもまだ外国語学校などない時代です。そして翌年5月、高瀬川沿いの神門郡大石村(後に大津村大字大石)に二階建の新校舎を建てて移転し、私立学校「包蒙館」を開設しました。これは明治42年(1909)まで存続します。

文芸誌『いづ茂』(4号より『いづ藻』)は、勝部貴一の長男一郎が編集や論説を担当し、明治26年(1893)3月に創刊しました。発行元の名称は「栄光社」となっていますが、その住所は包蒙館と同じです。地方における文芸誌としてはかなり先駆的な例と言えるでしょう。貴一はここに「其楽」「観川」等の号で漢詩創作法や日記を寄稿しました。

樋野さんはこの『いづ茂』の第2号(明治26年4月発行)～10号(明治27年3月発行)を所蔵していました(目録番号12)【写真2】。ほかにも、勝部貴一が「発意者」となった明治23年12月付の共立中学設立賛助会員名簿(目録番号21)があります。こうした郷土史料の収集には、故人が抱いていた家系や地域への愛着が感じられます。



【写真2】勝部一郎編『いづ茂(藻)』2～10号、栄光社発行、樋野温迪収集文書(第二期)12

### 3. だるま堂と樋野さん、田中史好翁

第二期史料受贈が完了した後、だるま堂店主の桑原弘さんに、お手紙とお電話で樋野さんの思い出を尋ねてみました。「樋野さんはとても穏やかな方でした。50年程前、安部吉弘さんの案内で店に来られるようになり、お客さんというよりは友人のように付き合っていました」とのことと、前述の樋野さんのご実家と勝部貫一の関係についても、桑原さんから伺って初めて知ることができました。

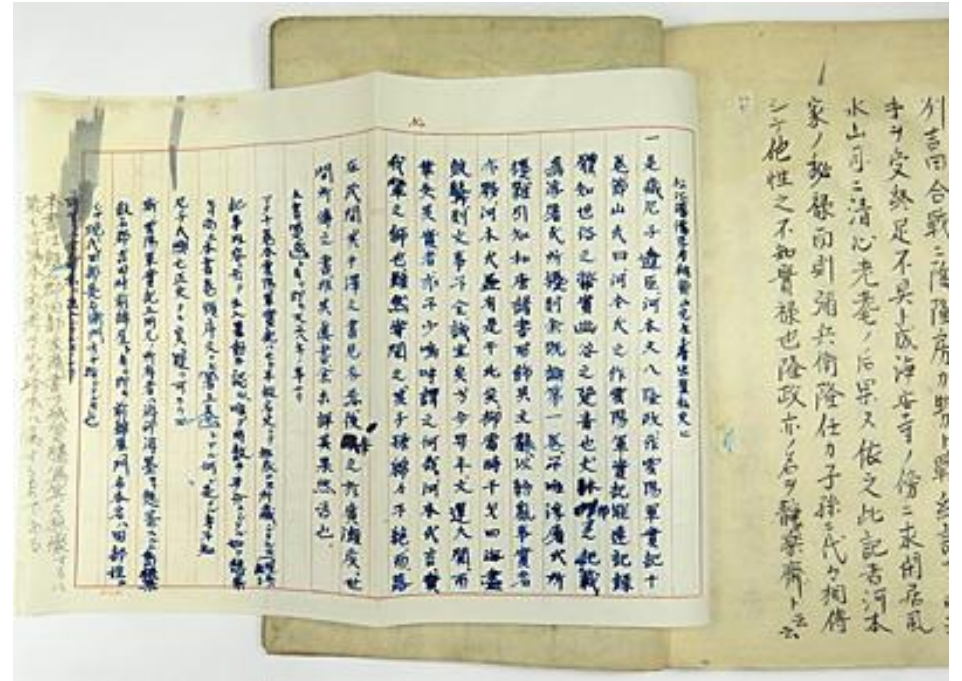
ところで、第二期収蔵史料の中には、「田中」の蔵書印と書入れのある『雲陽大数録』写本（目録番号8）【写真3】、同じ筆跡の解説原稿(?)が貼り込まれた『雲陽軍実記』（全5巻）写本（目録番号11）【写真4】がありました。



【写真3】『雲陽大数録』天保3年写、表紙と巻末部分



【写真 4】「雲陽軍實記」全 5 巻写本、表紙と巻末部分



実はこの印と筆跡、以前から時々図書館や当課所蔵の郷土史資料で見かけ、気になっていました。桑原さんに「樋野さんの蔵書に『田中』の印がありましたか…」と質問してみると、「そうそう、田中史好（しこう）さん。あのお爺さんが亡くなった後、本はうちで買わせてもらいました」とのこと。田中音市（史好と自称、快哉庵とも）翁は松江市灘町出身のいわゆる「市井の郷土史家」であり、山陰日日新聞紙上に昭和 29 年（1954）から連載され後に書籍化された『松江八百八町町内物語』（末次の巻、白湯の巻。後に復刻、新版あり）では協力者の筆頭に挙げられています。実は当時、田中翁を編者に紹介したのは桑原さんだったとのこと。また、田中翁は若い頃に布志名で住込みの陶工をしていたそうで、当時の記憶や聞き取りをまとめた自筆稿本『布志名焼集説』は島根県立図書館に収蔵され、布志名焼の史料として近年しばしば参照されています。

## むすびに

今回の寄贈資料を通じて、人と本は色々なところにつながっているものだ、と驚くとともに、「田中」印をめぐるここ数年の疑問も解けました。田中史好翁、樋野さん、松江市と伝わった郷土史料を、戦争関係史料とともに今後も大切に受け継いでいかななくては、と思いを新たにしています。

(松江市松江城・史料調査課歴史史料専門調査員／村角紀子／2022年12月26日記)

### 【参考文献】

- 石塚尊俊編 1993「勝部其楽」『出雲市大津町史』大津町史刊行委員会
- 石塚尊俊編 1968「勝部其楽」『明治百年島根の百傑』島根県教育委員会
- 田中史好稿『布志名焼集説』島根県立図書館蔵
- 半田礼子・米山美保子 2002『出雲市民文庫 18：勝部貫一（其楽）-出雲・英語教育の先駆者-』出雲市
- 半田礼子著刊 1997『主の祈り-「包蒙の白い道」補遺』
- 半田礼子著刊 1993『包蒙の白い道-出雲の教育者勝部其楽の生涯』

### 【追記】

勝部貫一をアイルランド留学に導いた J.J.クイン (John James Quin, 1843-1897) ですが、実は日本の漆工品の研究者・コレクターでもありました。明治 13 年 (1880) 10 月には日本アジア協会例会で「日本の漆産業 (The Lacquer Industry of Japan)」と題する研究報告を行っており、これは翌年の同会紀要に掲載され、1882 年版の『イギリス議会報告日本編』にも転載されました。クインの漆工品コレクションは英国王立植物園キュー・ガーデンの博物館に収蔵され、2001 年、同所で展覧会 (A Lacquer Legacy at Kew : The Japanese Collection of John J. Quin) が開催されています。